

S
M
O
K I N G ! !

○

例えば、電車の中で偶然隣に見知らぬ人が座ってきたとします。

ふとしたきっかけで、何気なく会話をして、話も盛りがったりして、だけどお互い目的地に着いたら、後くされなくお別れをする。大抵の場合、二度とその人と会うことはないでしょう。

ただ、その別れた人とどこかでまた偶然お会いして、親しい間柄となつていくことだつて、世の中にはあると思います。

人と人の出会いなんていうものは、そこいらに当たり前のようになり、そして当たり前のように別れがある。

二度と会うことがないであろうと思つた人と、再び出会い、関係が築かれていく。

親しい間柄であつた人と突然別れ、その後二度と会うことがなかつた。

こういうことつてなにも不思議なことではなく、当たり前のこととかもしなければならないけど、私はそんな人と人との出会いというも

のが不思議なものに感じて仕方ありません。

運命のいたずらなんて言つたら、ちよつぱり恥ずかしいけれど、そんないたずらや、何気ないきっかけがもたらす不思議な出会い。

暑さが厳しくなり始めた初夏のある日の話。私が出会つた、彼女と私の、不思議なようで、なんてことないお話です。

○

「暑いな・・・」

私、九十九里楓は、大学の講義後、友人達と別れ、帰宅すべく外に出ました。キンキンに冷えたクーラーボックスさながらの涼しさ、いや寒さが身を凍らせる大学構内と比べて、外は初夏というのに例年以上の暑さで私をむかえました。

「温暖化かあ」なんて現実味がなくせにつぶやいてしまう私です。私にとつて感じる現実はこの暑さだけなのです。温暖化云々いくら聞いても、一つも現実味がわきません。まだまだ頭の悪い年頃なんです。

私の通う大学は都市部の中心にあるので、周りは高層ビルが点在していたりします。もっぱら自然らしい自然がないため、いわゆるコンクリートジャングル。地熱のおかげもあつてか、いやなほど暑いこの頃です。

自然に囲まれた広いキャンパスでの大学生活を望んでいたのですが、通学距離的に断念。まあ都市のど真ん中にある大学なので、遊べる場所とかはたくさんあつて不自由がないのですけどね。ただ、なんだか自分には大学や周辺環境が息苦しく感じてしまい、なんとか周りで自分の憩いの場、オアシスな場所はないかと探しに探してきました。

そんな中、オアシスというほどのものではないですが、自分の安息の場としてある場所に最近足を運んでいます。

そこに行くのがもっぱら日々の日課となっており、本日もその場へ向かうべく、汗をかきかき歩を進めます。

「桐山商店」―看板に大きく書かれた文字は、昭和の古くからあるであろうこの店の雰囲気を嫌味なくかもし出しています。

木造建てのお店で、二階はアパートになっているのでしょうか、住居スペースのような作りになっています。一階の部分がお店と

してなっており、日用品から子供が喜ぶ駄菓子類など販売しており、このコンクリートジャングルの中に取り残された昭和の代表のように感じられます。

このお店の周りは古くからあるであろうアパートや民家などが立ち並び、下町といついてもいい風情が感じられます。

私は息苦しい都会の喧騒から離れ、この下町付近を散策するのが最近の息抜きなのです。どうにも昔から母親に「ばばくさい」なんて失礼なことを言われますが、確かにそうなのかもしれない。友人達と百貨店やアミューズメント施設に行くことよ、この下町でゆったりと時間を過ごす方が、自然と肩の力を抜くことができるのですから。

誤解がないように言っておきますが、別段友人達と仲が悪いわけでも、付き合いが悪いわけでもないのですよ。

でもやっぱり、友人達のリズムに合わせきれない自分がいるのです。そんな話をする母なんかは「若くないねえ、ばばくさいよあんな」なんて言うのです。失礼しちやいます、それでもお年頃の女の子に変わりはないのに。

友人達とのリズムが云々もありますけど、みんなに内緒にし

てることもあります。そのこともまた、肩の力が抜けない要因
になつているのかもしれない。

「暑いな、ホント……」

季節感を抜群に表現できるセリフを口にして、バッグの中から
取り出します。

「あ、もう一本しかない……」

「桐山商店」の一角に足を向けます。

「タバコ、買わないとな……」

タバコを吸つてることを私は友人達には内緒にしているのです。

○

女の子がタバコを嗜むというのは、私の勝手なイメージですが
あまりいいものとは思えないのです。

否定をするわけではありませんが、なんだか自分がとても素
行の悪い子に見えてしまうのではないかと思つて仕方がないので
す。

周りがどう私を見ようと一向に構いませんが、私も人の子な

ので、見知つて人から嫌われるのはいいものではありません。

友人達は私が喫煙者であろうが、たぶん友達の間までいてく
れるとは思いますが。だけど、やっぱり打ち明けるのは怖いもので
もあります。

そんなこともあり、友人達の前ではおろか、あまり人の多いと
ころでは喫煙をしないようにしています。

訂正、やっぱり私、周りからの私に対するイメージを若干気に
していたりします。

「桐山商店」はタバコも取り扱っているため、一角に灰皿が設置
されています。私の息抜き場所として、ここで一服が日課になっ
ているのです。「一服」つてはばくさいですかね。訂正。この「桐山
商店」の一角で、タバコを嗜むのが私の最近の日課であり、息抜
きとなつています。

「桐山商店」のその一角は、日陰にもなっているので、直射日光
からの避難所にもなっています。

今姿が見えないのですが、いつもなら設置してあるベンチの下
で一匹の猫さんが涼んでおられます。その猫さんは人に馴れて
いるのか近づいても逃げていきません。猫さんの方から歩み寄っ

てくることもそうないのですけど。

「今日はまだ猫さん来てないのか」

猫おろか、人影がほとんどありません。下町といえど、都市部の中心なのに人がいないとは不思議な話。

でも、普段からこの時間帯はあまり周りに人影もなく、私人ゆつたりとタバコを嗜みつつ時間を過ごせるのは悪いものではありません。外なだけ暑いことは暑いですが、日陰のおかげわずかながらですが涼しみの恩恵にあずかれます。日陰の中、ベンチに座り、タバコを嗜みつつ、アイスコーヒーに舌つづみをうつ。自分でやっていて思ってしまうのですが、やはり「はばくさい」のかもしれない。

しかし、そんな時間が私にとつての憩いなのです。

「そーいや、お店の中、いつも人いないが気がするけど、やってるのかな……」

いつも疑問に思っていることなのですが、なんだかこの「桐山商店」、営業しているのか、していないのか分からないのです。人の気がいつもないので。

「今日せつかくだし、少しのぞいてみようかな」

なんて思って、お店に歩をすすめると、突然ものすごい怒鳴り声が響き渡りました。

「ひッ！……なんだろ……？」

怒鳴り声が響いた瞬間、「桐山商店」の脇、今の私のいる位置から死角になつている場所から一人の女の子がもうダッシュで駆けていく、いや表現的には、逃げていくのが見えました。

「あのクソがきがあ！」

「桐山商店」の店内から外に出てきた、年配の方。たぶん商店の方でしょう、おばさんは女の子が逃げた方向をにらみつけて悪態をつけています。なんとも怖い。

「あのクソがきめが……自販をこんなにしやがつて……」

おばさんは設置してある自販機が壊れていないかを確認しているようです。どうやら逃げた子になにかやったのでしょうか。暑い中、冷静に観察している自分が若干馬鹿らしいです。

「ただじゃおかねえぞ、あのクソがきめ」

物騒なことを言って、お店の中に戻ろうとして、離れて立っている私と眼が合いました。

「ひッ……」

そのおばさんの鋭い視線はとにかく怖かったとしか言いようがありません。お年を召していられると思うのですが、おばさんと言つていいのか、とてもお若く見られました。

おばさんは私を一瞥した後、店内に戻つていきました。いやはや怖かった。

「今日はお店をのぞくのはやめにしようかな……」

面倒ごとに関わるのは得意としない性分な私ですので、今日も日陰のベンチにてタバコを嗜み、猫さんを観察するだけにしよう。

その後、面倒ごとに関わることになってしまうのは、少し先の話。

ここで、もう一人の女の子に登場してもらおうことにします。

○

これは私、桐山京が自室で悶えていたことから始まります。

けしていやらしい方面で悶えていたわけではありません。

私は「桐山商店」二階部分のアパートを借りて生活をしてます。

下宿しているという表現の方が正しいのかもです。

その日は、お給料日前日で財布の中には福沢や野口の姿が全く見当たりませんでした。どこへ行ったのやら、捜索は難航しております。いや福沢を所持していること自体減多にないので、ど。つて、なんの話だこれは。

ともかくお金がなく、埃まみれの貯金箱を逆さにしても、かき集められたのは六十五円。年頃の女の子……そう大人な私にとつて一日を六十五円で生活するなど到底考えられることはありません。ちなみに貯金箱の中には二円しか入っておりませんでした。これいかに。

私はとりあえず思考にふけることにしました。この状況、どう打破できるであろうか。私の中ではある欲求がオーバースト寸前であつたのです。おーばーぶーすとつてなんだ？

「暑い！暑い！暑い！我慢できない！」

エアコンなんていうものはこの部屋にはなく、部屋の隅にある扇風機は先日、なんの前触れもなく息を引き取つたため、送風手段は道端でもらつた消費者金融ローンの広告がどでかく書いてあるうちわしかありませんでした。さすがにローンを組む気に

機は勢いよくぶつ倒れる。私も倒れる。

「痛ッーあつっつッ」

なんだか足が腫れてしまったみたいであります。こいつは馬鹿をやった。

そのとき、階下から怒鳴り声がありました。それはもう割れんばかりの。

「クソがきがああ！なにやつてんだ！うるさいんだよッ！」

「やば、ばつちゃんッ！」

痛みを我慢しつつ、ばつちゃんの鉄拳から逃げるべくして階下へ駆け下りて外に出ます。中も相当でありましたが、外はさらに暑い。

「はあはあ……ばつちゃんは……追つてこないか……ふう」

安堵のため息をつき、日差しに手をかざします。中々日差しがきつい。

「夏だねえ……」

凡人に表現できる最適な季節表現であります。

「はあ……」

もう一度ため息をつきます。ポケットの中には六十五円。さ

てどうすれば……

「タバコ吸いたいなあ……」

私はどうしようもなくタバコが吸いたかったのです。

○

「桐山商店」は私、桐山京の祖母にあたる「桐山ハル」が営む小さな商店です。桐山ハル―私の言う「ばつちゃん」ですが―どうにも口が悪いお方で、鉄拳での制裁を日常茶飯事しかけてくる無鉄砲な無頼漢です。

周りの方々には「ハルさん」なんて呼ばれていて、多少は愛想よく振舞っているようですが、私には「ばつちゃん」であり、「鬼の化身」とでも形容すべき存在であるのです。

年の割には若く見え、私が「ばつちゃん」と呼ぶことに本人は嫌悪を示していますが、同じ血筋のおばあさんに当たる人なので、愛称として「ばつちゃん」と言つてなにも悪いことはないと思うのです。

私がかにかする度に、怒鳴りつけ、隙あらば鉄拳をぶちこん

でくるばつちゃんですが、周りの方々からの信頼は熱く、この「桐山商店」も下町の便利屋さんとして成り立ち、なくてはならない存在になっているといつてもいいでしょう。

「品揃えの悪いコンビニ」と表現したとき、ばつちゃんから鉄拳をありがたく頂戴したのは言わずもがな。

そんな私にとつての「鬼の化身」であるばつちゃんですが、割と優しいところもあったりと、お茶目な方なのです。下宿させてもらっているのもばつちゃんのおかげです。「鬼の眼にも涙」ではありませんが、怖いですが、同じぐらいに優しい祖母であります。

なぜに頻繁に私が怒鳴られなきやいけないのか私自身よく分からないのですが、大人な私をさらに大人に磨き上げる鍛錬のひとつかしらと最近では結論つけています。然らばその拳、甘んじて受け入れようぞ。

そんなばつちゃんの営む「桐山商店」の外で、私は思考を巡りめぐらせておりました。

「タバコが吸いたい。そのためには買うしかない。買うためにはお金がいる。ポケットには六十五円。さていかに」

暑い中、思考をめぐらせるのはなかなかの苦行です。ただでさ

え暑いのに、頭がカーツと熱くなってきました。

「ばつちゃんに頼む…いや無理だ…」

先ほど怒らせた手前もあり、かつあのばつちゃんが理由もなしに私に恩恵を授けてくれるとは思えない。

却下！

「やはりお金がいるか…」

三百円ほど手に入ればいい、今はそれだけで十分です。しかし、ほしいと三百円が無条件で手に入るほどこの世の中甘くはありません。

ふと隣に子供達が駆け寄り、ジュースの自販機にお金を投下していきます。

「ねえねえ、おねえさんに少しお金貸してくれない？」

「否、断じてしてはいけません。かよわい子供達からお金を巻き上げるほど、私は腐っておりません。というか、さも言ってしまうように書いてはいけなだろうこれは！地の文で出してくれさせて！ホントに言ってしまったみたいじゃないか！

しかし、そんな情景を浮かべてしまっただけでも、十分ダメである。大人気ない、京よあんたは大人だろ！

「早く行こうぜ、このおねえさん気味わりいよ……」

「ああ……ぶつぶつなんか言ってるよ……」

俊敏な回れ右をして子供達が逃げるように走っていく。どうして逃げるのでしょうか？私はプリチーな大人であるよ。

「クソッ！ああ、どうすれば！」

また下品な言葉遣いを。訂正。

「ペッ！ああ、どうすれば！」

訂正できてない！さらにひどくなってるぅ！

「……疲れたよ……」

一人、暑い中考えすぎたせいか頭が痛くなってきました。ニコチンが足りないせいでもありますか、イライラします。吸いたいイライラとはこのことで。

そしてちやっかり、さっきの子供達が使った自販機のつり銭箱の中を確認する私。

「……へへ、ないよねー」

確認した後、ひどく恥ずかしくなり、自販機に頭を叩きこみました。

○

ひどく疲れてしまったので、日陰のベンチに座って休むことにしました。

「どうするかなーああ……」

ベンチでだらーッと身体を沈めていると、脇の自販機の下から猫が出てきました。

「おんや、おタマさんじゃないの、これはこれは」

その三毛猫は近所のノラでして、私は勝手に「おタマさん」と呼んでいます。やっぱり猫と言ったら「タマ」でしょう。

かつ、おタマさんは人に相当馴れており、いや馴れているというより、人を気にしていない、どうにも人間という存在に対してはアウトオブ眼中な姿勢であります。そんな猫さんに尊厳をこめて「おタマさん」と呼んでいるわけです。大体日中はこの「桐山商店」のベンチの下で過ごし、夕方になるとどこかに行ってしまう。不思議な印象を放つ猫さんであります。

「おタマさん、今日も暑いですねー」

おタマさんは鳴くことも、こちらを見ることもなく、ベンチの下で丸くなります。不思議とそれが威厳漂う様だから不思議で仕方ない。

「おタマさんは丸々な身体なのに、よくあんな狭いところから出て来れますね」

おタマさんはさも当たり前と言わんばかりにこちらを見つめた後、毛づくろいを始めました。

「おタマさん、私お金が必要なのですよ。三百円ばかり恵んでもらえませんかね？」

猫がお金をくれるわけがないと分かりつつも、なんとなく気晴らしでおタマさんに投げかけてみました。

「ニヤア」

「え？……へ？……」

「お、おタマさんが鳴いた？」

おタマさんは普段鳴くことなどほとんどない猫さんであるが故、そのお声を聞けることはとても貴重なのであります。これはなにかご利益があるに違いない。

「おタマさん、是非私めに道しるべを！」

「ふん、人間風情がツ！とも言わんばかりの視線を投げた後、おタマさんは自販機の下をにらみ始めました。

「……おお！なるほど！自販機の下ですな！さすがおタマさん！」

興味をなくしたようで、毛づくろいに再びもどったおタマさんに手を合わせ感謝する。やはりおタマさんは並大抵な猫さんではありません。神々しき猫神の化身ではあるまいか！

「おタマ様。私は今後、敬意をこめておタマ様と呼ばせていただきます」

「うむ、人間よ、されば行け。とも言わんがごとく、喉を鳴らすおタマ様。おお、これは本当に猫の神なのかもしれません。

「では、いざ参る！」

おタマ様に一度別れを告げ、目指すは自販機の下。

「これは中々に狭き道！」

いくら華奢な体つきの子の私の私であるとはいえ、この自販機の下に潜り込むのは至難とみた。

「いやしかし、おタマ様の導がある今、行かないわけにはいかなー！」

私は勢いをつけて自販機下に潜り込もうと、

「いや、やっぱり無理でしょ」

早々に諦めました。

○

自販機下の特攻を早々に諦めた私ですが、ここで引くわけにもいきませんでした。

世の中「うっかり」なことが多々あります。この自販機の下にも人々の「うっかり」の所業の産物が眠っているにちがひありません。

要は「うっかり誰かがお金を落としたりだろう」希望的観測に期待しているのです。落ちてろお金！

先頃アパートで悶絶していた時分より大分経ったようで、暑さが一際の昼下がりに。日陰な場所であっても、暑いことに変わりはありません。地面のコンクリートはとつても熱い。そりゃあ熱い。

そんな「灼熱地獄」と化しているコンクリの路上に私は腹ばいになって、自販機の下に腕をつっこみ、レッツトレジャーハンティング。

冒険に危険と苦労は付き物です。

「うろうろ熱い。痛い。熱い……」

路上のコンクリはザラザラしていて痛い。そして熱い。ホフク前進のような構え、完全に身体を地面に密着させ、肩口限界ギリギリまで腕を自販機下につっこみます。

傍から見ればとても無様な格好になっていますが、今はそんな綺麗事考えている余裕はありません。もう吸いたいイライラも臨界点突破寸前。甘んじて大人気なさをかなぐり捨てて！

「う……う……いつ……」

最早苦悶としか形容できない意味不明な唸りが口から出てきます。しかし、なんだか楽しくなっている自分でもあるのです。世の中なにか起こるかわかりません。もしかしたらこの自販機下に思わぬ大金や宝石、高額賞金が当たっている宝くじなんか眠っているかもわかりません。そりゃあ前にここで百円落としたりのよね！

「ひっ……」

今なんだか足がたくさんあるなにかが私の手をかすっていききましたよ。キニシナイキニシナイ……。

「おっ！……おっ！」

手先に触れる金属めいた物体の感触。円形の小さな物体を捕獲。

「この感触は……」

銅とニッケルの合金素材！推測する模様は美しき八重桜とみた！

「百円玉取ったああっ！」

世の中そう幸運にめぐり合うことはないと聞きます。むしろ幸運にめぐり合うことこそ幸運なのであります。

「……」

コインはコインでもパチスロのコインじゃあ意味がないのよ。

○

さしておもしろくもない結果が出た自販機下遺失物拾得大作戦。むんずと掴んだパチスロコインは一応ポケットの中。

それから再度のチャレンジを試みたものの、出てくるのはゴミ

としかいいようのないものばかり。なんだか「果たし状 桐山ハル

殿」と書かれている紙が出てきましたが、見なかったことにしようと思えます。いいですか、地雷は踏むものではないのです。

「……くっそおおお！」

もう大人態度なんてもうの気にしてる余裕はございません。くそなのはくそなのです！

「うううう……タバコがああああ」

吸いたい。めっちゃ吸いたい。

自販機下に好機ありと導を説いたのであろう猫のおタマ様はいつの間にかやらベンチ下からお姿を消しておりました。猫さんは気まぐれですからね。私もいざこへと去りたいでありますよ。

「おタマ様……私はどうすれば……」

タバコが陳列されている自販機を眺めつつ次の一手を模索すべく、再び思考を巡らせます。

「この自販機も相当古いよな……」

その時思い出された一場面。ぼつちゃんが自販機にタバコを補充しているところに出くわしたことがありました。

——とある日の。

『…大分ガタがきてるね…交換時かね』

『なにやってんの、ぼっちゃん？』

『なんだよクソがき、店番してこい』

『クソがきて…自販機調子悪いの？』

『もう相当昔から使ってきたからね…色々ガタがきてるみたいなんだよ。さっきも金入れたが出てこないと文句がきてさ』

『交換すれば？』

『簡単に言うんじゃないよ。金かかるんだよ。まあだがそろそろ新しくしようかね。こいつもそろそろ疲れただろう…』

『労わるように自販機に触れるぼっちゃん。うん、やっぱぼっちゃんいい人じゃない。』

『ぼっちゃんはお金を取り出して、自販機に投入、ボタンを押しました。見事に反応なし。』

『このクソがッ！』

『ちよ、ぼっちゃん！』

『ぼっちゃんは容赦ない蹴りを自販機にかましました。さっきの労わりの心はどこへやら。』

うん、やっぱぼっちゃんひでえや。てか、こんなことしてるから壊れるんじゃないの。

ドカドカつと何発か蹴りをお見舞いされた自販機からタバコがガコンツと出てきました。

『まったく、これしきの蹴りで出てくるとは、やっぱり交換したほうがいいかもしれないね』

『いや、そういう問題じゃないでしょ』

—うるせえよクソがき、とぼっちゃんは言い残して店に帰っていききました。

『あんたも苦労してるのね』

老朽した自販機に同情の念を抱き、私もその場を後にしました。私だけでもこの自販機に慈悲の心を向けなくては…。

—回想終わり。

「…や、やるか？」

八方塞がった私の最後の手段。ちと非道だが、やるしかあるまい！成るままに！

「許せ自販機ッ！」

私はぼっちゃん譲りの蹴りを自販機めがけて繰り出します。

私は厄介ごとに巻き込まれるのは全力で避けたい性分でありまして、慎ましく、ことなるべく静かに人生を歩みたいと考えております。しかしながらやるべきことをむざむざ放棄する逃げ腰をみせるわけにはいきません。ですので恐る恐るも桐山京が猛撃をしかけていた自販機のそばまで行つてみました。

「へこんでるじゃない……」

自販機のつり銭箱のあたりが軽くへこんでいました。どれだけやればこうなるのやら。野蛮の所業です。

「今のうちに、今のうちに」

そう思つて私はタバコを取り出しました。

「そうだ、もう一本しかないのよね」

へこんでいる自販機にも私愛用の銘柄があつたので、お金を投入しようとお財布を取り出しました。

「ええと……びつたしあつた」

硬貨を数枚取り出して、自販機に投入しようとしてました。

が、その時手元から硬貨が落ちてしまいました。

これが私の不覚。なんとも後で思い返してみると、なぜ手元が狂つたのであろうか甚だ疑問であります。これが引き金。

「あ……やばッ」

自販機の下に吸い込まれるように私のマネーが入つてしまいました。不運であります。

「ああ……奥まで入ってないといいけど」

私は自販機の下に屈んで、中をのぞいてみます。自販機下は狭く、もちろんのこと真つ暗で奥の方はなんにも見えません。

これは見つかるかなーなんて思っていたら、なにやら奥より気配がしました。

「ん……？なにか動いてる……？」

自販機の下はそれはそれは真つ暗になっていますので、よく見えません。なにかが動く気配がするのですが、そのなにかが分かりません。

「なんか光ってる……？」

不思議な二つの光が私の方を——見つめているのでしようか。その光はとつても厳かな光に感じられる気がしました。

だんだんその光は私のほうに近づいてきます。恐ろしくも感じましたが、どうにもその光に視線が捉われて動けません。

「なに？……なんなの……？」

私の眼いつばいにその光が照らされた瞬間に、その「なにか」が自販機下より出てきました。

「……ね……猫さん……っ？」

なんてことない、いつも「桐山商店」のベンチ下にいる三毛猫さんでした。猫さんはこんなにも狭い中をどうやってかは知りませんが、出入りすることができるみたいです。猫とは不思議な生き物です。

ぬるりと這い出てきた猫さんは私を一瞥すると、喉を軽くならし、ベンチの下へと向かっていきました。

「猫の眼は、あんなに強烈な光を出すものなのかしら……」

暗闇で猫の眼が光るのは分かる気がしましたが、懐中電灯の光さながらの強烈な光を放っていた猫さんの眼には驚くしかありませんでした。眼で射られるなんて初めての経験です。ドッキリしてしまいました。

「あの猫さんは不思議な力でももっているのかな」

などとメルヘンなことを考えつつ、自販機下の硬貨を取り戻すべく再び意識を戻すと――

「エッ……」

突如出現した自販機下にのびる腕。

「エッ……」

私の腕は二本とも、両手でお財布を握っております。

「エッ……」

私の腕でなければ誰の腕？ 私には阿修羅像の如く腕数本はございせんよ。

「へッ……」

なんだか固まつてしまったみたいです。ついでに「へッ……」とか言っちゃってます。さっきまで猫さんのメルヘンを考えていた私に現実として突き刺さったのは、誰かの腕が自販機の下に伸びていることなんです。そりゃ固まります。びっくりします。人が来た気配を感じられなかったのですし。

「……」

無言。腕も無言。いやたまに動いてますけど。がさがさつて。

ここで私が第一に成すべきことは一つ。年頃の純情乙女が成すべきことは一つ――

「……きあああああああああああああああああ！」

可愛らしく叫びをあげさせていただきました。

「なに！なんなんですかいったい！」

若干声をあげてしまったことに後悔を感じました。というのも、騒ぎを聞きつけて、あの、とても恐ろしいお店のおばさんが飛び出してくるのが怖かったのです。ただ、飛び出してくる気配はありませんでした。

そして、私が叫びをあげた瞬間自販機下にのびていた腕がすくっと持ち主の胸元へ。そこには先ほど全力ダッシュをかました女の子、腕の持ち主である女の子、後に知る桐山京なる人物がおりました。

「ああ、すいません、ごめんなさい！ちよーと勝手に身体が、腕がのびてしまったもので」

「び、びつくりさせないで下さい！」

「ホントごめんなさい！悪気があったわけではないんです本当に……」

「いやまあ、別に構いませんけど……」

身体が、腕が勝手に動くってなんですかいったい。ともかく、これが最初に桐山京という女の子と出会った瞬間でした。ファー・ストコンタクトとしては最悪ですけど。

その女の子はよれよれのTシャツに、デニム生地ホットパンツをはいた、とても健康そうな子でありました。身長も私より高く、足も長くて……む、胸も私より……あるかないか……。髪は肩のあたりでバツサリと切られており、とても快活な印象を受けました。実際快活というよりじゃじゃ馬のような人なのかもしれません。……とりあえず最初の印象はそんなとこでした。

「ごめんなさい本当に。ただ困っているみたいだったので。ちよーと先走りすぎてしまいました」

「え、ええ。困ってはいませんが……」

「……お、お金落としたんでしょう？」

「そ、そうです。小銭を落としてしまって。自販機の下に入ってしまったみたいで」

「よ、よければ私がお取りしますよ。その服汚れてはもったいな……」

「いえ、あなたこそ。悪いので大丈夫ですよ」

「いえいえ、先ほど私この下を、そ、掃除！掃除していたので、汚れる分には大丈夫ですから」

「いえいえいえ、人にお頼みするほどのことでもありませんので、大丈夫ですよ」

「いえいえいえいえいえ、この自販機の下はとでも……危険！危険なので、私がやりますよ」

「いえいえいえいえいえいえ、それでも悪いですので構いませんから。……て危険？（ほそり）」

「いえいえいえいえいえいえいえ、ここは私に任せてくれないでしようか？」

「いえいえいえいえいえいえいえ、それでも私が……」

「なんでしょう、この「いえいえ」合戦は。日本人はこんなにも「いえいえ」を連呼する人種であったのだろうかなんてことはどうでもいいとして、私も人のことを言えたものではありませんが、この女の子も相当粘る。なぜここまで固執するのであるうか。

「ただ自販機の下にお金を落としただけなのに。」

「まんまとお金を盗む気なのでしょう。たつた三百円ほどの硬貨をそこまで欲することはないと思うのですが、考えてもみる

と先ほど店のおばさんに怒鳴られた張本人。自販機蹴り飛ばしの主犯なのですから、窃盗をする可能性もなきにしもあらず。あまり人を疑いたくはないのですが、私もみすみすお金を盗られるわけにはいきませんので、ここは慎重に行動しなければいけません。

「あ、あの……」

「いえいえいえいえ……え？」

私が声をかけると女の子はキョトンとした顔になりました。いつまで「いえいえ」言ってるんですかと心の中でつつこんでおきま

す。
「……なぜ、そこまで気にかけてくれるのですか？」

「え……へ？」

そう、まずは相手に先制攻撃。返答次第で出方を探ろうと考えます。戦略なしに戦は勝てません！

そんな私の疑問に女の子は考え込むしぐさをみせています。善意による手助けなら、こんな考え込むことないでしょう。

女の子は「ううむ……」と考え込んでいます。いや考えることかよ！とつつこみつ、私は即座に判断をしました。

「こいつはクロだ！まっくらだ！絶対なにか企んでいる！」

警戒レベルを一気にマックスに引き上げた私は自分の手で落とした硬貨を拾うことを決意しました。

「今の私にどんな話術も聞かないぞ！騙されるもんか！かかつてらっしゃい！」

武術の技をいざ繰り出さんばかりの型を構えつつ、脳内イメージですが、この女の子、いやこの女の出方を待ちます。

するとやつと視線を私に合わせ、彼女が口を開きます。

「いざ尋常に！」

「この下には……」

「この下には……っ！」

「なんだと言うのだ！」

「あ、足がたくさん生えた生き物があるので……とても危険ですッ！」

「すいません、お礼をするので拾っていただいてもよろしいでしょうか？」

斜め四十五度に前傾姿勢！これが生粋の日本人のお礼の姿勢！

私の決意は崩れ去り、むぎむぎと目の前の敵に破れた瞬間。

「ああ、私、真っ白になってしまいました。」

詐欺師に会ったら私騙される人間になるね。

「よ、よし。任せてください！」

そう意気込んで、自販機下に挑む女。

「よ、よろしくお願いします」

それを見守る私。

告白します。私、虫とか大の苦手なのです。

○

横から失礼させてもらいます。桐山京とは私のこと。

なぜ私が今一度の自販機の下特攻をしかけたのか、時間は少しばかり戻させていただきます。

全力ダッシュにてかの「鉄拳の鬼ーばっちゃん」から逃げ出したことはすでにご存知かと思えます。夏の暑さをじんわり感じながら、滴る汗をぬぐいつつの小休止を終え、「桐山商店」に再び戻ろうと腰を上げました。

もう喫煙したい欲求は臨界点突破し、私はかゆさを紛らわすために手当たり次第モノを噛みまくる子犬のように、なんでもいいから噛みたい、噛みまくりたい気分でありました。ただ噛みたくてもそこいらのモノを噛むほど常識外れではありませんし、かと言ってお金を出してモノを買うほどの金銭を持ち合わせていなかったのは承知の事実でありました。

ジ・エンド！なこの状況、もうどうしようもないもどかしさに、頭をかきむしり、地団駄を踏んでおりました。

通りがかかった親子連れは「見てはいけません」と子供を引き離して走り去り、通りがかかったサラリーマンは「今の若い子は」云々ぼやいて通り過ぎ、通りがかかったおじいさんは「わしも若い頃はそんな時代も」云々語り去り、通りがかかったお巡さんが「ちょっと君」とか言って近づいてきたので、さすがに逃げました。

とまあ、我慢の限界を超えた境地であったのです。

どこに行く当てもなく、向かうは「桐山商店」。そろりそろりと周辺の様子を気にしつつ戻ります。

「桐山商店」の自販機が見えてきました。すると、私が散々蹴飛ばしたタバコ自販機に近づくと一人の女の子。

「ち、ちくしょう……」

もう限界を越えた私は獲物を狙う狼のごとくその女の子を凝視します。ホントちくしょうな気分でした。

大人げないのはもう仕方がない。同じ年頃に見える女の子は自販機でタバコを買うのでしょうか。——なぜそれが私でないのか！私が一体なにをした！同じ人間じゃないか！

「ううう……」

なんだかとても悲しくなっていました。

「私だつてえ……私だつて……」

タバコが欲しいのです。

○

悲しくなっても、状況はよくなることはないことは百も承知でした。

承知の上、女の子を凝視し続けることにしました。浅ましい……とこの上なし。

女の子は可愛らしいであろうお財布から硬貨をとり出して自販機に投入しようとしています。——むむむ……むむ……

うなつたところで仕方がないのですが、うならずにはいられない心持ちでした。

「ちやりーんと硬貨が落ちる特有の音が響き、私は一際反応をしてみましたことはなんとも恥ずかしい限り。浅ましいことこの上なし！」

「落としたのかな・・・かな」

特に女の子の不幸にしめしめしていたわけでは・・・若干しめしめしていました。羨ましかつたんだもん！どうせ私は浅ましい子ですよ！

女の子は自販機の下に屈んで、奥を覗きこんでいます。これは間違いない、自販機下に硬貨が吸い取られたようだ。しかも奥に入ってしまったようで。

「ふむ・・・はッ！」

瞬時に思考が巡りめぐります。今日はやけに頭を使う日ではありませんな。かつこよく言えば「ブレインストーム」全開です！

「これは・・・いけるかもしれない。ふふふ・・・」

「このときの私の顔は・・・巧妙を思いつき、にやついた顔にでもなっていたのでしょうか。人は悪いことを考えるとき一番の笑顔

になるんだよーとぼつちやんが言っていました。うむ、確かにそうかもしれないですね。しかし、悪巧みを思いついたわけではありません。これはたぶんあの子と私、お互いハッピーになれるであろう巧妙でございます。ハッピースマイルを浮かべていた私でありましょう。

脳内でシミュレートしてみます。何事も予行が必要。

「・・・むむむ」

私：「ねえ、その困っている貴方！そう貴方ですよ」

女の子：「あら、なんでしよう、大人なおねえさん？」

私：「今、このおんぼろ自販機の下にお金を落としてしまいましたね！」

女の子：「そうなんです、このおんぼろ自販機下にお金が吸い取られてしまったの」

私：「ここは私がとつて差し上げましょう。お洋服が汚れてしまわれます」

女の子：「まあ、なんてお優しい方なんでしょう。お礼はずみですわ。お願いしてもよろしいかしら？」

私：「いいえいえ、なんてございませぬ。ではいざ！」

私：「ササツ、ガシ。よしとれましたよ」

女の子：「まあ、なんてお早いの。感嘆して言葉も出ませんわ」

私：「いえ、これしき。ではこれで」

女の子：「待つてくださいまし。まだお礼が済んでおりませんわ」

わ」

私：「そんな。礼など不要です」

女の子：「いえ、それでは私の気がすみませんわ。どうかお願い、

お礼をさせてください」

私：「そこまでお願いされては……では謹んでお受けいたしたい」

女の子：「なにがよろしいかしら。なんなりと申し上げて」

私：「では……一つお願いを。タバコを一本恵んではくださいま

せんか？」

女の子：「あら、そのようなことではかまいませんの？」

私：「いや、もう十分すぎるほどであります」

女の子：「一本とは言わず、一箱、いえカートンでもついでいつて」

私：「これは……かたじけない。謹んで頂戴いたします」

女の子：「いえいえ、ふふふ」

私：「ははは」

……

「これはいける！なんという見事なシミュレーションであります
しょうか！いや私は未来をみてしまったかッ！

私は完璧なまでの未来を予測してしまいました。自分でもびつ
くりです。その設定で私を主人公にした物語が一本できますね。

「まあ、現実はこの口調での会話にはならないだろうけど。
あとカートンはないだろうな」

「まだまだ予測が甘いことを反省しますが、ほぼこの通りにいく
と断定。」

「想定外がある可能性もあるけど、それも想定内の範囲だ」
ちよつぱり大人な発言すぎたかもしれませんが、読者皆さんは

私の考えに賛同してくださいさるでしょう。

「よし……いざー！」

私は彼女の元目指して歩をすすめました。輝かしい未来のた
めに。

「(、これは……)」

状況確認。女の子は自販機脇に屈んで、どこぞから現れた猫のおタマ様と戯れている。その彼女のすぐ脇、脇というか隣、脇も隣も一緒かもしれない、とにかくすぐそばで、自販機下に腕をつつこんでいる私。どうして！

「(想定範囲外！)」

—夏の暑さにとどういつてしまったか！

おタマ様と戯れている彼女にそつと近寄り、声をかける予定、否未来のはずだったので、自販機下に間違いなくニツケルと銅の合成素材、すなわち白銅から成る百円玉を見つけるやいなや、身体が勝手にずさーツと滑り込み—腕をつつこんでしまい—若干抜けない感じになってしまっているのです。

—なんて卑しい人間なのでしょか、私は！浅ましさもいい加減にしろ！そして夏の暑さが悪いのです！暑さが私を狂わせた！狂った太陽め！くたばれ温暖化ツ！

にしても、なぜに彼女は私に気づかないのでしょうか。見事なまでの滑り込みをかましたのに彼女は気づくこともなく。

私はそんなに空気感のない人間なのでしょか。うるさい奴だとかはよく言われますが、空気な人間扱いされたことは今まで一度となかったはず。なんだかまた悲しくなってきました。

「(なんとか状況を……打破せねば)」

—思い、腕を抜こうとした瞬間、

「えツ……」

「へツ……」

キョトンとする彼女に「へツ……」とか返してしまう私。これは、確

実にこれは想定範囲外の事態が起きる！

—瞬間、

「……………きあああああああああああああああああ！」

—想定範囲外ツ！

○

さて、予測と現実の事態が重なることは天文学的見解の域であると私は一言申し上げたい。

夏の暑さのせいでありませう、私は我を忘れていました。未来な

んて見えるわけないじゃないですか。誰ですか、その気にさせたのは！

悲鳴を上げられた後のやり取りは彼女が先ほど語ってくれたと思います。

その時の私はというと、ばつちゃんが悲鳴を聞きつけてやってくることに戦慄し怯えておりました。しかし一向に出てくる様子がなく、なんとも急死に一生を得たりな心持でした。

そして、殊勝に彼女に謝る私。ホントに悪いことを、びつくりさせてしまったことを反省していたのです。

「いやまあ、別に構いませんけど・・・」

女の子は私の所業に許しを与えてくださいました。いい人だな。とっても優しいお方！

彼女はとても可愛らしい女の子でした。清楚なワンピースに身をつつんで、カチューシャを差したとっても長い黒髪が風にゆられてサラサラと・・・ああこういう格好は自分には似合わないなあ、ロングヘアなんて自分にはダメだろうなあなんてこの女の子の可愛らしさに羨望を抱きつつも、現状を予測する未来に向けるべく思考を巡りめぐらせます。

—むっちゃ頭使ってますよ今日は！

とりあえず印象を悪くしてはいけない。自分がアヤシイモノではないことを説かねば！

「ごめんなさい本当に。ただ困っているみたいだったので。ちよつと先走りすぎてしまいました」

「え、ええ。困ってはいませんが・・・」

再度謝りつつ、アヤシイ人間ではないことを主張します。若干彼女の声に対する警戒心を感じるが、さして問題ではないでしょう。出だしに問題はない！

「お、お金落としたんでしょう？」

「そ、そうです。小銭を落としてしまって。自販機の下に入ってしまったみたいで」

よし、お金を落としたことを事実として再度確認。これで私が拾いますの流れにもついていく！

「よ、よければ私がお取りしますよ。その服汚れてはもつたいない」

我ながら相手に配慮したGJすぎる文言。

「いえ、あなたこそ。悪いので大丈夫ですよ」

「いえいえ、先ほど私この下を……掃除！掃除していたので。汚れる分には大丈夫ですから」

ちよつと掃除していたというのは怪しすぎたかな……

「いえいえいえ、人にお頼みするほどのことでもありませんので、大丈夫ですよ」

「いえいえいえいえいえ、この自販機の下はとても……危険！危険なので、私がやりますよ」

う、まずった……危険とかなに言ってるの私！

「いえいえいえいえいえいえ、それでも悪いですので構いませんから。……て危険？（ぼそり）」

「いえいえいえいえいえいえ、こは私に任せてくれないでしようか？」

この子中々粘るな……諦めるわけにはいけません！私の約束された未来のために！

「いえいえいえいえいえいえ、それでも私が……」

むむむ……中々手ごわいな「いえいえ」連発で翻弄しようと思つていましたが、彼女も返してくるとは……実に手ごわい！

私が硬貨を自販機下より回収しなければ約束された未来が

ない！逆転の一手を！思考よ働け！

「あ、あの……」

「いえいえいえいえ……え？」

ーせ、先手を打たれたーッ！

「……なぜ、そこまで気にかけてくれるのですか？」

「え……へ？」

ーこ、こいつは強烈なパンチのある問い。私の思考力を停止にかけるともりかつ……。

気にかける理由……理由……。それは色々理由はある。色々あるが故に返答に困る。

ーこの子……強いッ！

「それはですね……」

私が拾つて、見返りとしてタバコを恵んでもらうなどと口が割けても言えない。自販機下に彼女が近づいてはいけないことにする。しかし、その理由は……

「むむむ……」

やばい、思考が顔に出てるのかな……ものすごく怪訝な顔をしてるよ、まずいよ！

近づいてはいけない、汚れるは却下……危険。そう危険！なぜ、なぜ、なぜ……。やばいな、急がなくてはますます怪しまれる。

「この下には……」

「この下には……？」

——うおお、急ぐあまりに口から出てしまったああ。下には下には下にはなにがどうなってる……

「あ、足がたくさん生えた生き物がいるので……とても危険ですッ！」

——やつてしまった……あまりにもアホすぎることを……虫なんて危険でもなんでもないだろう……。

そんなアホ面してるであろう私に向かって彼女は——

「すいません、お礼をするので拾っていただいてもよろしいでしょうか？」

思い切り頭を下げておりました。見事な斜め四十五度姿勢！

「よ、よし。任せてください！」

——これは……勝ったのか私……？

勝った負けたの問題ではないですけど、できる限りの、私の勝

ちとるべく未来へと方向が向いたのでしょうか。

私は自販機下に硬貨回収のため身を屈めつつ、思います。

これは想定範囲内なのであるか——と。

○

虫が大の苦手な九十九里楓、またまたの登場です。

私は足がたくさんとか目が八つあるとか、虫さんに失礼ですが、そのような奇形の生き物を許容する広い心は持ち合わせていないのです。

虫の話を持ち出されたら、もう私に対抗策はございません。ですので、この女の子にすべてを託すことにしました。逃げることも勇気です。

「ほ、よつと……」

女の子は自販機の下まで屈んで、私の落とした百円玉を必死で捜索してくれています。洋服が汚れてしまうことなど気にしてはいない様子です。

先ほどまで彼女を思い切り疑っていたことを、なんだか恥ずか

しく感じてしまいました。

「大丈夫ですか？無理しなくていいですから」

「いえいえ、すぐ見つかりますよ、ちよつと待つててくださいね」

にしても、よくもまあこんなに狭いところに腕を入れられるものだ——なんて感心してしまいます。

「あ、やべ抜けね……」

「……」

しばらく自販機下で格闘した後、「見つけ」と可愛らしく一言ついた女の子が立ち上がり、手のひらを差し出しました。

「んー、なんか二枚しか見つからなかつたです。意気込んだくせに、すみませんです……」

「あ、いえ全然いいですよ。奥まで入ってしまったみたいですし仕方ないです。お手数おかけしました」

「いやいや、お役に立てずに」

「そんなことないですよ、ありがとうございます」

お札を言いつつ、彼女から硬貨を受け取ります。もう百円は自販機下の奥の奥にいつてしまったのでしょうか。ここは素直に諦

めます。

私より身長が高い彼女は屈託のない笑顔を浮かべています。私

はこんなにもまぶしい笑顔は作れません。

「タ、タバコ買うのですか？」

なんだかひきつった笑顔をしながら彼女は私に問いかけます。なんて表情豊かな方でしょうか。

「ええ、もう手持ちがないので」

あまり人にタバコを嗜んでいることを知られたくない私ですが、この場に至つて嘘をついても仕方がありませんし、なんてことない会話の一つとしてお答えしました。

「そ、そうですか……そうれすか」

「……？」

「れすか？なんででしょうか。」

特に彼女につっこもうとはせず、私はタバコの自販機にお金を入れます。

「ええつと……」

自分愛用のものを選んでボタンをプッシュ。ガゴツと明らかな不良音が響きましたが、無事商品は出てきました。

この一連の私の動作に対して、脇からなにやらものすごい視

線を感じた気がしますが、気のせいでしょうか。

ちらりと脇に視線をずらすと、手持ちぶたさになっている彼女を見受けました。赤の他人とは思いつつも、一応は恩人です。無下にするのは失礼に値します。いやな沈黙が流れる前に、私は勇気をもって少し会話をしてみようと試みます。

「あの……」

「は、はいはいあはい。あんでしよう？」

「……………」

試みは早速失敗してしまつたのでしょうか、なんだかものすごく緊張しているような雰囲気を感じます。

私は見ず知らずの人間と会話することに正直慣れていませんし、緊張するものだと思うのですが、このときはなぜか冷静でいられたのでした。

「よくこの辺に来るのですか？」

「いやあ、暑いですよ、ホント暑い！」

会話のキヤッチボールが成り立っていないのですが……彼女はソワソワと落ち着かないような素振りをみせます。そしてものすごく汗をかいております。

「あ、暑いですよホント」

「そ、それはもう温暖化ですから……」

「……………」

「……………」

温暖化の話題が続くこともなく、私と彼女の間に沈黙が訪れます。天気の話は会話の糸口としては常道だと思つていましたが、そううまくいかないみたいです。

私もなんだかソワソワと緊張してきてしまい、とりあえずタバコを一本口にくわえます。もう大学から出て何時間経つているのでしょうか。そう長くは経っていないはずですが、体感時間の経過としては数時間の時が過ぎたかのような思われました。

「シゴ……」

ライターでタバコに火をつけます。チリチリとフィルターと葉が焦げる音と共に煙が空に舞い上がります。

「ふ……」

吸い込むと、メンソールタバコ特有の爽快感が喉を通ります。とても久しぶりのタバコのような気がしました。

「ふ……」

取り込んだ煙を吐き出します。湯気のようにゆらりと空に消えていく煙を眺めると、とても気持ちが悪くなります。

「……………」

実は先ほどから気になっていることがあります。

「ふ……………」

隣から強烈な視線を感じるのです。妙に視線を感じてはいたのですが、私がタバコを取出しから突き刺さすような気配を感じずにはられませんでした。視線を感じると実感したのは初めてです。

「……………」

キシナイキシナイとおまじないのごとく自身に言い聞かせながら、煙を舞い上がらせます。

会話もなにもあったもんじゃありません。

「ふ……………」

「ちよ、ものすごく顔が近づいてきてるのですが！近い、近いよ！」

さすがに耐えかねた私は、半分まで灰になったタバコを灰皿に捨て、問いかけました。

「な、なんでしょうか？」

彼女は一瞬ビクッと反応して、モジモジし始めました。

「やつぱりこの人、怪しすぎるよ！」

「え、いやあ、そのーあはは」

変な笑いを浮かべる彼女です。アヤシイモノ以外の何者でもありません。

「……………なんでしょう？」

「こは引くわけにはいかないと執拗に彼女を追い詰めます。理由もなしに、ジロジロと見られるのはさすがに気持ちのいいものではありません。」

「そ、それはーですね、そのー」

「……………」

それーあのーあはは、と彼女ははぐらかしてきます。そんな彼女の、その視線、先ほどから感じる視線を放つパツチリとした目は、私の左手を捕捉しているようです。なんともあからさまに。

彼女の真意をたぶん汲みとることができた気がしました。

「……………ふう、タバコ一本吸います？」

「……ホ、ホントですか！いいんですか！」

「やつぱり――さすがに私もこのぐらいの空気は読めますつて。」

「ええ、どうぞ、メンソールですけど、大丈夫？」

タバコをもった左手を彼女の方に差し出して答えます。

すると私のその左手をガシッとつかむ彼女。

「ひっ……」

さすがに私はびっくりしてしまいました。腕ごともっていかれる

るのではないかとぐらいに。

「あ……」

「え……？」

「ありがとうございます。うううううううう！」

「は、はは、いえ。どういたしまして……」

驚きました。今日は驚かされればなしな気がします。いえ怖い
たという方が正しいでしょうか。

だって両目に涙浮かべて、感謝されるのはじめてのことでした
から。

彼女が私の今唯一の願望、いや救いの手を差し伸べてくれたと

き、気づかないうちに目から汗がとめどなく溢れ、その救いの
左手を握り締めてしまいました。なんとも恥ずかしいかぎりで
す。

過剰表現かもしれませんが、そのぐらい私はそのとき嬉しかった
たというのは事実です。救世主とはかくのごとき。この黒髪の乙
女に乾杯！

「タバコを一本いただけませんか？」のただ一言も言えず、浅ま
しいほどの羨望の視線で彼女を射てしまったことは大いに反省し
なければいけません。

ただこのとき、彼女がタバコを取り出した時分から、暑さで完
全に頭がまいったのであろうか、なにをどうしていたのかよく憶
えていなかったりなのです。彼女が何か私に問いかけてきてくれ
たのですが、もう頭の中では「暑さが温暖化が二酸化炭素オ」と
グルグルしていたものですから、なにを答えたのであろうか定か
ではありません。

一度彼女がその小さな唇にタバコを挟み込み、ろうろうと小

さな火で先端を燃やし、紫煙を舞い上がらせた瞬間、身体がその煙に誘われるように彼女のそばへと動いておりました。

—ああ、私も煙のように空へ舞い上がる事ができたらどんなに気持ちのよいことか、空の上はそれは風もあつて気持ちいいだろうなあ—と蒼穹に思いを馳せはじめていたとき、彼女がその意識を引き戻してくれたのです。危うくの昇天から救つてくださった彼女になんとお礼を申したら！

そんな朦朧とした中でも、私の目は彼女の小さな左手に握られたタバコに捉われていたことを、恥ずかしながら告白いたしました。—「欲」というのはなんて恐ろしい！

今回ばかりは遠慮という慎ましさをかなぐり捨て、彼女の申し出をありがたく受け取らせていただくことにしました。

「ふーっ……」

彼女からタバコを一本受け取り、火をつけます。愛用のジツポライターがオイル切れをおこしてしまつたみたいで、悪戦苦闘している私に彼女はライターを差し出してくれました。なにかも彼女のおかげであります。

久方ぶりに吸い込む煙は身体に染み渡るようでした。身体に

毒とは知りつつも、この一本がどうにもやめられないのです。

「ふーっ……」

「随分切らしていたみたいですね、おかしいかもしれませんが、とてもおいしそうに吸いますね」

「いやーホントにうまいです」

「あはは、そうですか」

彼女は笑みを浮かべながら、夏空に顔を向けました。その顔を失礼と思ひながらも横目で見つ、煙を空に吹き出していきます。普段メンソールのタバコは吸いませんが、この時ばかりは通り抜ける爽快感に身をゆだね、煙の行方を追つて夏空を仰ぎました。

○

受け取ったタバコを彼女はとても気持ちよさそうに吸い込んで吐き出していきます。タバコを吸う姿がとても似合っているといえますか、様になっているといえますか。かつこよく感じてしまいました。

私という人間は、あまり多くの人様と馴れ親しむこと自体に慣れておりません。道端で出会った方などと会話をしたり、時間を共有したりすることは得意としていないのです。言ってしまうと人見知りなのです。

隣の彼女がとてもおかしい、失礼ですが変な方であることはもう十分に承知してしまつたつもりです。しかし、なぜそんな方とこのようにゆつたりと時間を共にすることができるのか、会話をすることができるのか、自分でも不思議に感じて仕方がありません。

面倒事には極力関わらない、馴れ合いを不得意とする。そんな自分の性を十分にわきまえているつもりであり、かつ隣の彼女は明らかにその対象であるはずなのに――不思議とその場から離れる気が起きないでいたのです。

長続きしないような人と関係を持つことなど、自分にはできそうにありません。長続きしないものであるのなら、いつそのことと出会わないほうがいいんじゃないか。そんなことを考えている自分です。

その自分がたまたま出会った彼女に、タバコを差し出して、な

んとなしに二人でその場に居続けていること。普段の自分であれば、早々にその場でお別れして離れるものでありますが、いやむしろ、この商店のおばさんが怒鳴り声を発したあの瞬間に回れ右で帰る、そんな選択肢を選ぶのが常の私であると思います。今日はなんとも自分に疑問や不思議を感じられる日であると夏空を仰ぎながら考えていました。

隣で彼女はおいしそうにタバコを嗜んでいます。彼女も夏空に意識を飛ばしているのでしょうか。

「いやーホントにうまいです」

その姿はやつぱりかつこよく見えました。

○

それからなんとなしにお互いのことを話し始めました。彼女が六十五円しか持つていなく、それでもどうしてもタバコが欲しかったこと、猫の導きに従って自販機下の格闘のこと、自販機を蹴り飛ばし、商店のおばさん「ぼっちゃん」に怒鳴られ逃走したこと、私のことを観察していたこと……

—どれもしょうもなくはない？

「どれもこれも回りくどいやり方ばかりじゃないですか！私
のこと狙つてたとかなんですか！」

「いや、ホントごめんさい！どうにも暑さにやられたみたい
で、自分でもなにやつていたかなんて」

彼女は子供のようない顔でそんな話をしてくれました。ど
うとつても怪しい人間に違いはなかったのですが、どうにも私は
それを怒ったり、批判したりする気にはなれませんでした。

むしろ、その話を聞いて楽しくなってきたことに気づき始
めていました。

自分とは真逆の人間とまでは言いませんが、私のもたない発
想や、ベクトルで物事を捉えて、行動しているであろう彼女に、一
種の羨ましさを感じていたのかもしれない。普通すぎる私に
は彼女のような真似はできませんから。

私はなんとなく二本目のタバコに手をつけて、火をつけました。
その脇でまたもやソワソワしている女の子。そんなにソワソワし
ないで—。

こほんツ…せわしなく動く彼女の片手を見て、これが普通で

あるとは到底思えません。

「…もう、一本どうです？」

「…いいですか？」

やっぱりね。そんな彼女に対して、自然と笑みを浮かべている
自分であつたのです。

○

私は彼女に自分の今日一日を話していました。何気なく会話
をし始めたなら、どうにも饒舌になつてしまい、あれやこれやと
私の恥ずかしい行動記録がペラペラと口から出てきます。

彼女はその一つ一つに興味を抱くように反応してくれるので、
話している自分もまんざらではなくなつてきてしまいました。

彼女のこと少し知ることができました。大学生で、講義を
終えてここに来たこと。頻繁にこの下町界隈を散歩したりして
時間を過ごすこと。私はこの界隈をよく知っているので、下町の
話題も交えてお話ししたりしました。

どうにも私は彼女から見ると変わった人らしく、自分は普通

すぎる人間だからと言います。私も特に普通に変わりはないと思っております。ぼつちゃんの鉄拳の更生措置のおかげで常識をわきまえた行動をしていると思うのですが――自分で自分を見つめるのと、人から見られるのでは印象なども違いますしね、さして嫌な気分ではなかったです。

彼女は二本目のタバコに火をつけ始めました。どうにも欲深さが身体に出てしまう悪い性質の人間である私みたいです。そんな私に彼女はもう一本タバコを恵んでくれました。もう彼女には頭が上がりません。感謝感激の雨あられであります。

二本目のタバコに私も火をつけます。

「ふ……」

二人で吐き出す紫煙は蒼穹に向かって消えていきます。ご飯もそうですが、誰かと一緒だとよりおいしく感じるものです。

太陽が西に傾き始め、もうすぐ空がオレンジ色に染まる時間です。

「おい、クソがき」

「げ、ぼつちゃん……」

ベンチに座って話をしていたら、「桐山商店」からおばさん、彼女の祖母「ぼつちゃん」が出てきました。

既にベンチから腰を若干上げた彼女は逃げの姿勢に入っています。もの数秒でのこの反応。身体が勝手に憶えこんでいるのでしょうか。それだけ彼女は「ぼつちゃん」が怖いのでしょうか。私も昼間の怒鳴り声だけでも恐怖だったんですから。

――というか、この状況、私はどうすればいいのでしょうか？

「つたく、このクソがき……ほれ」

「……へ？」

ひよいとおばさんの手から彼女の元へと投げ渡されるなにか。彼女は信じられないといった様子でそれを受け取ります。

「いや、これ……いいのもらって？」

「いつまでももらいタバコってわけにいかんだろう、今回だけだからな」

「ありがと……ばあちゃん」

――ふんツと彼女の反応を見た後、ぼつちゃんは私の方に目を

向けました。

「あ、あの・・・」

「悪いね、うちの馬鹿が世話になっちゃって。ほら、あんたも持っていきな」

すべすべした、とてもおばあさんとは思えない手から手渡されるタバコの箱。いきなりであったので、驚く前に受け取ってしまいました。

—にしても私の愛用してる銘柄をいつ知ったのでしょうか。

「いいんですか、悪いですよ・・・」

「ガキが遠慮するもんじゃないよ。それに代金はもらうからな。

あのクソがきが払ってくれるだろうけどね」

「ぼっちゃんは自分の孫娘をあごで指しながら言いました。

「ぼっちゃん、そりゃないよー」

快活に笑い声をあげるおぼちゃん。—私もガキつて言われるのか・・・

「てかぼっちゃん見てたの、私達のこと？」

「お前がまたろくでもないことしてかさないか監視してたんだよ。そう、あのおんぼろ自販機、近々交換するから手伝えよ」

「やだよーめんどくさい」

「このクソがきがッ！誰のせいで交換しなきゃいけない羽目になつたんだよ、ああ？」

「すいませんしたッ！」

全力で頭を下げる彼女。そんなやり取りを見ていて、突然私は笑いが止まらなくなっていました。

「はは・・・あはははははッ」

「なんだよ、ガキが、暑さでいっちなまったのかい」

「コラぼっちゃん、失礼でしょ、その言い方は」

「指図するかこのクソがきがあ？」

「すいませんしたッ！」

「ははは、あははは・・・お腹いたひッ・・・」

私は久しぶりに思い切り笑った気がしました。息苦しさを感じていた日常的一幕では考えられなかったことです。こんなに声をあげて笑える自分がいたことに気づいて、それさえもおかしくなってきました。

「あははは・・・おかしいな、はははは」

「お前がおかしいわ、クソがき」

「ぼつちゃんたらもう……でも、確かに変な笑い方するわね」

「ははは……あははは」

それからしばらく私の笑いは止まりませんでした。何気ないやり取り、他愛もない日常の景色。そのようなものでも、おかしいおもしろいと感じられる自分がいること。そんな自分がいたということ。おかしいというより、今自分はこの時を楽しんでいる。

それがたまらなく嬉しくて笑っている。

「はあはあ……おもしろいな……あはは」

「ああ、おもしろいぞおまえは」

「確かにおもしろおかしいね、うん」

それから三人で笑いあいました。何気ない日常の中にも笑いが溢れることって、こんなにも楽しいものだったんで。そんな当たり前のことを、久しぶりに気づかされたような気がしました。

○

「そういや、名前聞いてなかったな、名乗れガキ」

「あ、私も聞いてなかったよ。てかぼつちゃんホント口悪いよ」

空がオレンジ色に染まり始めた頃、おばさんが口に出した話題。そういや、名前言ってなかったな。おかしなことです。

「私、九十九里楓と言います」

「なんだか珍しい名前だな」

「くじゅうくりかえでかくすごい名前だね！」

「はは……よく言われます」

確かに珍しい名前なのかもしれない、昔から名乗ると必ず一言言われるぐらいですから。

「私は桐山京。で、こっちの口が悪いのが、私のぼつちゃんて桐山ハル」

「一言余計だよクソガキ」

「よ、よろしくお願いします」

桐山京。それが彼女の名前。一生忘れることがない、彼女の名前。

「今の今までお互い名前を言ってなかったなんて、おかしいね」
「本当にね。まあ苗字ぐらいは気づいていたのかと思って。どでかく名前出ているしね」

そう言っ指したのは「桐山商店」と書かれた看板。確かに、

気づかないほうがおかしかったのかもしれない。

「え、あんた桐山だったっけ？こんなクソがきはうちの家系にはいないぞ」

「ちよちよちよつと、勝手に存在を否定しないでよ」

「じゃあ、気づかなかつたのも仕方ないですね」

「ちよつとお、楓も無理やりばつちゃんに呼吸合わせないで

よー」

夕暮れが近づき、昼間の暑さはどこへやら、心地よい風が吹き始めました。名前を呼ばれてちよつぱり嬉しくなっている私でした。

「おや」

ハルさんが自販機下に近づいていきます。

「おタマ様！またこんなところにいたのですか」

京が声を上げます。

「猫さんいつの間に」

「おタマ様つていつのことかい？」

三者三様の反応で自販機の下より這い出てくる猫、京が言う

「おタマ様」に注目しました。

「なんか口にくわえてるぞ」

どれどれと覗き込むと、汚れまみれになったおタマさんは確かに口になにかをくわえています。

「これは……」

「あ……」

誰かさんが思う、銅とニッケル云々、銀色に光る百円玉をおタマ様は口にくわえておりました。

「金拾ってくるとは、この猫風情が……」

「ばつちゃん、おタマ様に失礼は許さないよ」

隣でぎやーぎやーやっている中、おタマ様は私の元にやつてきて、口にくわえた百円玉を落とし、いつものベンチの下へと向かっていきました。

「この百円……」

「楓、楓！これ、さつき自販機の下でなくしたやつだよ！私が見つけれなかったやつ！おタマ様が拾ってきてくれたんだ

よー」

「へえ、随分と人情味のある猫じゃねえか。魚でもくれてやるか」

ハルさんは店の奥に戻ってきます。そんなハルさんの背中に「刺身で用意しなきゃダメだかんね！」

と叫ぶ京。私は百円を手にとつて、ぼけーツとしてしまいました。

不思議で仕方ありません。猫さんが落ちた百円を拾い、それを私の元に返してくれた。そんな猫の摩訶不思議、今まで聞いたことありませんでしたし。

おタマ様は悠々と毛づくろいをしております。昼間に見たこの猫さんのまぶしいほどの眼の光を思い出して、私はちよつと鳥肌が立ってしまいました。

「楓、おタマ様は不思議な猫さんなんだよ」

「え？」

「私は猫の神様じゃないかなーなんて思つてたりしてる。なんでもかつて聞かれても、答えられないんだけどね」

「猫の神様……」

おタマ様は喉を軽く鳴らして、こちらを一瞥します。猫の神様か……そんな不思議があつてもおかしくはないよね。

私はおタマ様の元に近づいて手を合わせます。

「ありがとうございました、おタマ様」

隣に京が寄ってきて、同じく手を合わせて拝みます。

「私も、ありがとうございました！おタマ様！」

「京もなにかおタマ様に？」

「へ、だつておタマ様のおかげで楓と出会えたみたいなものだし」

「え？」

「だつて、昼間、自販機下から出てきたおタマ様と戯れていたでしょ？その姿を見たから、楓と会うことになったんじゃない。まあ楓がお金落として云々もあつたけど……まあおタマ様のおかげでもあるかなーつて」

——はははーと笑う京。私はこれがホントにおタマ様のおかげであるのなら、おタマ様を教祖として崇め奉る宗教でも立ち上げさせていただきます。

それはともかくとして、おタマ様の、ただの猫の気まぐれなのか、ホントに猫の化身で巡りあわせをしてくれたのか、色々不思議に感じるけど、こうやって京という時間を過ごしているのは、自分からすすんで向かっていったことに間違いはありません。私自らが、一緒にいたいと感じたから。

まあ日本人に対しては絶対に口にはしないことだけど。

自分は今まで人と人との出会いとか関係とか、まるで他人事のように考えていました。自分から下手に関係を作ったりはしない、受身の、ただひたすらに待つ姿勢。それが楽だったから。余計な関係をつくることにならずにすむから。

だけど、今日はそんな自分が、自分から「桐山京」という女の子に関わろうとしている。一緒にいようと思っている。

—友達になりたいって思う。

道端で出会った京と友達になりたい—人間っていうのは変わるものなのでしょいか。そうであるのなら、私は今日の自分にとっても嬉しさを感じます。この当たり前前のように、不思議な出会いを大切にしたいと感じているのだから。

「か・え・で！」

出会いのきつかけなんてものはなんでもよくて、猫の導きでも、タバコ一本でも。

でも、そこから始まる関係っていうのは、自分自身で掴んでいくものなのかもしれません。

そう思うと、人との人の出会い、いや人に限らず出会いとい

うものは不思議なものでもないのかもしれない。それでも不思議に感じてしまうのは、年頃の乙女の至りだからに違いない。

「なに？」

「タバコ、ちよーだいッ！」

「ええーさつきハルさんにもらったじゃん！」

「いいじゃん！友達じゃん！」

「…そうだね、友達だもんね」

「そうだよ、もう楓とは友達！同じ釜の飯を食った仲なのです

よ」

「…いや、それ違うくない？」

「いいんだよ—とかくちよーだいよ—」

お店から、刺身をもった皿を抱えてハルさんが出てきました。

「うるせえなクソがき共が。楓、刺身できたが食っていくか？」

「やりーさすがばつちゃん！」

「い、いただいでいこうかな」

「ほれ、おタマさんも」

「ンニャー」

「鳴いた！おタマさんが鳴いたよ！」

「猫だから鳴くだろうが」

「私初めて聞いたかも、おタマさんの鳴き声」

「あ、それより、楓、タバコ」

「うるせえんだよクソがきが！」

「ンニヤ」

この後、私と彼女の何気ない、ちよつぱり不思議を含んだ日常が待っていることを私は知る由もありませんでした。

今はただ、この夕暮れのオレンジと、夜の帳を運ぶ風に身をゆだねてみることにします。明日のことなど分かるはずがありません。京みたいに未来でも見えない限りは。

こうしてこの夏の日、彼女と当たり前のようで、不思議な出会いがありました。やっぱり、人と人との出会って不思議なことっていっぱい気がしてなりません。そう感じる理由は一年頃な乙女のメルヘンとかと思っただけだと。

少しはメルヘンな考えをしても、誰も文句はないでしょう。

やっぱりまだまだ私も「ガキ」だから。

そう、それに私は思うのです。

こうやって、皆様とお会いできたのも、

—きつとなにか、不思議な御縁。

あとがき

はじめまして、文月十四と申します。お手にとつてくださった方、どうもありがとうございます。

一応自己紹介なんぞを。私は二十歳過ぎた男の子ですッ！

なんと簡潔でわかりやすい自己紹介でありましょうか。そんな人間いくらでもいるわつていう話なので、もう少しばかり。

ク〇みたいな大学生やつてますッ！

学生証コピーでも貼つてやろうかと思いましたが、一つもオモチロクない上に、読んでいる方々に不愉快この上ない思いをさせってしまうのは目に見えていますのでやめておきます。

つまらない自己紹介はおいておくとして、今回はじめてコミティアに参加、むしろ即売会にサークルとして参加するのは初めてであります。ホントにどこの馬の骨かわからん奴の文章を読んでいたことに、申し訳なさどありがたさでいっぱいです。

サークル参加は前々からの野望でしたが、「参加しても出すものねえよ」っていう話の堂々巡りでなにをどうしようと考えてい

ました。イラストとか漫画なんて描けないし。文章しか書くことができないけど、評論とかできんし：：ノ、ノベルしかない。」と、かくなんか出すッ！」の見切り発射で書き上げたものですし、こうやつて物語を一区切りつけることまで書き上げることは初めてのことでしたので、色々と至らない点が多々あったと思えますが、どうぞご容赦下さいまし。

本作品は「SMOKING!!」とタバコを嗜む女の子の話のはずなんですけど、「SMOKING!!」してなくね?と書いた本人は疑問に思います。これいかに！

タバコ云々よりも、人と人との何気ない出会いとか、日常とかがベースになってしまいました。その出会いのきっかけとしてタバコが出てきたっていう感じですかね。どうでしょうか?(誰に聞いてんだよ)

路上でライター貸してくださいませんか?」と貸してあげ、そこからキャツキャウフフな出会いとかないかなーとか、高速バスで隣に座ってきた子と仲良くなつて、キャツキャウフフことないかなーとか、そういうロクデモナイ妄想がこの作品にはこめられていたりなかったり。とっても嫌な作品に思えてきましたね、

ええ。

今回は二人の女の子の出会いの話、はじまりのお話になりませう。女の子がどういう子なのか全然触れてないという！全体的に見たら、エピソード部分な感じです。この後の二人、どんな子なのかどんな話があるのか、私も大いに気になるので、続きに期待したいと思います。あと、言わずもがな、タバコは身体によくありませんからご利用は計画的（略 二十禁とかにはならないかしらこれ…。

イラストもがんばって精進してなんとかしたいと思います…：が上達する気がないので、誰か描いて下さい。。。やっぱり女の子出てくるし、イラストって不可欠だね。それよりもまず自分分は巧みに文章が書けるように努力しなければです。

だから書いてしまいました、「創作をしたい」という情熱をもつて、素人なりにその思いこめて書き上げた物語です。よろしければ今後も宜しくお願いできればと思います。ブログとかツイッタとかやっていうので、感想とかいただけたりすると嬉しいです。

それでは、読者諸賢の皆様に出会えたこと、嬉しく感じつつ、

また不思議な御縁がありましたら、次の機会に。

2010年5月4日 文月十四

S M O K I N G ! !

文・イラスト — 文月十四

発行 — 七月飛行機関

発行日 — 2010年5月4日

印刷 — コピー機様

「七月飛行機関」ウェブ

— <http://h14sys.blog.shinobi.jp/>